

琉球大学学術リポジトリ

沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究

メタデータ	<p>言語:</p> <p>出版者: 高良倉吉</p> <p>公開日: 2009-03-03</p> <p>キーワード (Ja): 沖縄県多良間島, 伝統的社会システム, 八月踊り, 琉球, 水納島, スツウプナカ (豊年祭)</p> <p>キーワード (En): Tarama Island, Okinawa Prefecture, Traditional society, Dance of August (8-gatsu odori), The Ryukyus, Minna island, Sutsuupunaka(celebration of a full harvest)</p> <p>作成者: 高良, 倉吉, 池宮, 正治, 山里, 純一, 玉城, 政美, 川平, 成雄, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, 大胡, 太郎, Takara, Kurayoshi, Ikemiya, Masaharu, Yamazato, Junichi, Tamaki, Masami, Kabira, Nario, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa, Ogo, Taro</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9027

多良間の組踊台本に関する若干のコメント

池宮正治*

1. 「忠臣仲宗根豊見親組」の写本と作者

多良間島には「忠臣仲宗根豊見親組」を初め、「忠孝婦人村原組」「多田名組」や「忠臣身替」それに「手水の縁」がある。その中でもっとも注目すべきは、宮古の伝説(歴史)に取材した「忠臣仲宗根豊見親組」である。しかし誰が何時ごろ書いたのか、これまでのところまったく分かっていない。

現在の写本は「光緒十五年八月吉日写之」とある。明治22年西暦1889年の写本であるが、これが成立年でないことはいうまでもなく、誤写と思われる箇所もまま見受けられる。作者は首里那覇出身の士族で、組踊の製作に精通した者であろう。首里・那覇言葉は当時の琉球国の士族にとっては、いわば共通語で、琉歌を作ったり三線を弾いたりするなど、教養の範囲でもあった。したがって宮古士族の作者を想定してもよいが、「豊見親組」は他の組踊と比較しても相当に沖縄言葉に対する筆力を感じさせるもので、組踊にいつそう通じた者の手になるものと思われるのである。筋は宮古の豊見親勢が悪逆無道の与那国の鬼虎を退治する話で、好色の鬼虎を「唐の楊貴妃、日本の小野の小町にもおとらむ美女」あふがま、こいがまを踊り子に仕立てて討ち取るというもので、このくだりは、組踊「二童敵討」の阿麻和利と護佐丸の遺子二童(踊り子)を意識したものである。与那国が天然の要害であることを強調したところでは、「いかな唐の蜀の栈道は飛鳥も飛らん程のきんそ(陰阻)、一夫守てどもおらは、数万の軍兵も責めならん」と表現している。他の組踊に見られないもので、『三国志』か『三国志演義』あたりを参考にしたのだろう。組踊は能楽と異なり、古典を下敷きにしたり、ひけらかすことが極端に少ないが、この組踊には古典籍からの知識の投入が見られ、これまでにない表現の幅を感じさせる。

出発前の航海安全を祈願した願文も面白い。次のようにある。

御願書

祥雲寺御室前

弁財天堂御前

右意趣者与那国嶋之鬼虎悪逆無道之行、背王命族、為討果与那国嶋渡海仰願者、
首尾能鬼虎討果、御万人安堵、順風自在、海路安全、如意令満足事偏仏神之

* いけみや まさはる 琉球大学法文学部教授

奉蒙御威光者也。仍願文如件。

月 日

この次に仲宗根豊見親以下の、願主である豊見親たちの名が連なる。冒頭の「祥雲寺御室前」の「御室前」は、「御宝前」の誤写か「室」の衍入であろう。こうした点はあるものの、この願文は例えば王府の嶽々や寺社への願文と殆ど同じ形式で、作者がこれに通じていたことを物語っている。ただ正式な願文にはこの願文の次に供物のリストが書かれる。慶世村恒任が1928（昭和3）年沖繩宮古新聞に別本から翻字して発表した「古本組踊仲宗根豊見親の鬼虎征伐」には、この箇所は、

御願書

漲水御嶽御位部御室前

古意角姑依玉天地の御神

右意趣者与那国嶋之鬼虎惡逆無道之行、背王命族、為討果与那国嶋渡海仰願者、首尾能鬼虎討果、御万人安堵、順風自在、海路安全、如意令満足事偏島建之神古意角姑依玉二神、天地乾坤之神々之奉蒙御靈驗者也。仍而願文如件。

嘉靖元年吉辰

とあり、宮古島在来の神々に置き替わり、土地の組踊に馴化していつている。ここでも「御室前」になっているのは、この二本の前にも誤字が生じていたことを示している。

2. 「忠孝婦人村原組」の「着付」

「忠孝婦人村原組」というのが多良間の組踊台本の題名だが、この組踊は「忠孝婦人」とも「大川敵討」とも、主人公村原の活躍によって「村原」とも呼ばれていることは、周知のところであろう。多良間の台本はこの二つを合体したものである。「忠孝婦人」と「大川敵討」が正式な呼称というところで、戌の冠船の時には二つの名称が使われている。さて、多良間の「村原組」は本文も比較的にしっかりしたものだが、注目すべきは「着付」がある点である。この「着付」というのは、舞台上の衣裳という意味では「コスチューム」に近いし、化粧部分を除いた「扮装」ということばにも近い。これに刀や団扇などの小道具を加えたものが組踊でいう「着付」なのである。おそらく能楽や歌舞伎でいう「着付」とも関連すると思われるのだが、能楽では、狩衣や長絹・水衣などの下に着る摺箔、白練熨斗目、厚板などの小袖型の衣をいうのである。また歌舞伎では衣裳を、前を打ち合わせて着るものを「着付」というのであって、組踊のようにコスチュームに近い形でいうのは組踊の特色である。

組踊の台本にはまれにこの着付が付いている。まれに付いているのであって、付いていな

いのが普通のことである。冊封使歓待のために演ぜられる組踊や舞踊には詳細な記録があり、これには必ず着付がつく。これに準じた御殿殿内の舞台にも着付が付けられることがある。着付のある台本は概して質のよい台本だといえる。その意味で多良間の「村原組」は多くの組踊本のなかでも相当に良いものと見ていい。詳しくは後に述べるとして、本文を紹介することにする。

大川敵討（拍子木打候得ば、琴三味線手毎にて村原出る。敵討之時大鼓・ひや・ちやうちやく打、ぶらがい吹）

着付、谷茶の按司、髪金入錦之入道頭巾（向に金磨之龍角飾有る）、刀差、緞子衣裳、羅陣羽織（錦之飾有る）、脚絆、足袋、大団羽持。

石川・満納、髪黒縹子入道頭巾（向金欄にて飾有る）、絹布衣裳、刀差、脚絆、足袋。

門番、髪黒（縮）めん入道頭巾、絹布衣裳、脚絆、足袋、差繩（持）。

ちやうちやく持、髪かぶらう、絹布衣裳、脚絆、足袋、高つぶひ。

若按司、髪角かしらへ、板メ縮緬振袖袷衣裳、緋紗綾足袋、風車持。

村原、髪黒縹子入道頭巾（向に金欄にて飾有る）、絹布衣裳、縹子広袖羽織、刀差、脚絆、足袋、但中入より黒縹子入道頭巾、あみ笠かづき、物売かぐに細物入付かたげ出る。陣賦之時より羅陣羽織、甲かづき、胸当、脚絆、足袋。

原国兄弟、髪半向頭巾、紕縮緬衣裳、脚絆、足袋、中入より黒縮緬入道頭巾（向に飾有る）、長刀持。

村原母并妻、垂髪、紫長巾、作花差、琉縫薄衣裳、紕縮緬足袋。同人妻、谷茶城江参候時、女笠かづき、杖持出る。且遁帰候時途中に而、喜瀬の大屋子より長刀渡し。

西川之子・瀬底下庫理・西川之使・喜瀬大屋子、髪黒縮緬入道頭巾、絹布衣裳、刀差、脚絆、足袋。

泊、髪紕縮緬巾に而請八巻、玉色染木綿衣裳、脚絆、足袋。陣賦之時より、髪黒縮緬入道頭巾、絹布衣裳、刀差。

付、村原妻、子抱出る。子紕縮緬衣裳。

※翻字するにあたっては、句読点、濁点を施した。括弧（ ）内は本文二行小書きになっている。括弧〈 〉内は欠字を補ったことを示す。

上の着付は、伊波普猷の、戌の御冠船の時の台本を底本にした『琉球戯曲集』にある、組踊「大川敵討」の「着付」と殆ど同じで、実にハイグレードのテキストを入手していることになる。こうした着付記事は、組踊が盛んで多くの写本を残している八重山地方にもないので、沖縄本島でも御殿殿内の由緒ある台本にしか見られない。その場合着付の品位を王府

の舞台より下げるのが一般で、村原、石川・満納、ちやうちやく持、その他の男が「絹布衣裳」となっているのがそれで、もとは「黒紗綾袷衣裳」とあるものである。また村原母并妻乙樽の衣裳は「琉縫薄衣裳」となっている。これは琉球で仕立てた「縫い」と「薄」(ハク)つまり刺繍と摺箔の技法で製作した打掛け衣裳のことで、組踊の女、舞踊の女踊りにも用いられたのである。それにこの衣裳は冊封使を招いた舞台でしか見られず、城下の御殿殿内では、これに対して紅型衣裳を着るのが定番だった。これが多良間の写本に書き換えられずに残ったもので、その元の資料が王府に近いあたりのものであることを、かえって裏付けている。それが近代以降のことなのかどうか、筆写年代が分からないので明らかではない。

3. 福祿寿

確かめる時間的な余裕もないので、あるいは見当違いの物言いになるかも知れないが、小生手持ちの相当以前に複製した仲筋村の組踊「忠臣仲宗根豊見親組」の台本には、初めに「福祿之言葉」がある。筆跡も「豊見親組」と同一人のものと思える。ここにあるべきものかどうかはさておき、翻字して紹介することから始めることにする。

福祿之言葉

- 一 出たる者福祿と申ものにて御座る。さても当今の御仁徳には、四海浪静にて、国も豊に民栄ひ、治る御代の有難や、はてのいべすのこなたまで、我が大君の国ならば民のかまどはにぎわひて、人の姿もあたゝかに、福祿招くしるすとて、老も若きも皆勇め、躍ひ企ちましい。先老番に若衆躍、二番に女躍、三番に二才躍、四番よりは色々の狂言で御座る。何にぞ御見さましい事ではあらましにども、何れも様、緩りと御見物被下ましい。そうと御なぐさめにならば、誠に有難き事で御座る。
- 一 先御暇被下まし。

仲筋村の八月踊りの時に、幕開けに演じられるもので、当日は「福祿寿」の看板がでる。烏帽子をかぶり、大口袴を穿き、黒い羽織を羽織り、右手に軍配団扇を持って出、「福祿」と名乗る。祝言を述べて座を清め、若衆踊りから順次踊らせるのでどうぞご覧ください、といったおもむきである。これは、髭も黒く、老人の形こそしていないが、長者の大主と少しも異ならず、人の理想である福祿寿の徳を兼ね備えた人物であって、元来は老形ではなかったかと思われる。右の詞章は所々意味もとれないほどに転訛しているものの、大方の意味は分かる。『多良間村史』第五卷音楽編「芸能」(1988年)によると、古老の話として、廃藩置県前までは仲筋は福祿踊り、塩川は大福踊りを上演していたが、廃藩置県に反対の意志を示すために、ヤマトグチ口上の福祿踊りや大福踊りをやめて、両村とも「長者の大主」を上演していたが、仲筋村は世情落ちつくとともに元の福祿踊りに戻ったのだという(621頁)。

こうしたヤマト下りの翁系統の芸能は全琉にある。「長者の大主」がその代表的なものが、多良間の「長寿の大主」もそれである。冊封使を歓待する首里城の舞台でも、中秋宴では、冒頭一番におもろ主取が老人の姿で現れ、おもろを歌って座を清める。次に少年（若衆）を中心にした入り子踊りがあり、その中にも老人の姿をした天孫氏と、ヤマト系の大黒天が混じっている。この大黒天は丸帽子を被り、白い袋を担げ、手に大きな才槌を持っていた。戌の御冠船の記録を見ると、二才踊りは上演されていない。向こう鉢巻き、黒紋服、あづまからげ、縦縞脚絆の出で立ちがヤマト風俗めいて思えたのか、上演されなかった。それでも、冊封使の目の前にもヤマト的なものがあったのである。そのヤマト的な福祿踊りが詞章とともに多良間に伝来していたのであって、むしろ意外なことではないと受け取るべきであろう。

4. 舞台その他

那覇にいと何事も那覇を基準に考えてしまいがちだが、冠船芸能の嫡子のように思っている古典芸能も、大変な改変や変化の波を受けている。例えば、現在では地謡が上手に居並ぶ形をとっているが、これは戦後定着したもので、かつては舞台奥の麻の幕で仕切られた舞台裏で歌ったもので、三間四方の舞台に上手下手に出入り口がある。それに王府の舞台は、下手に橋掛がつき、その奥に楽屋があった。近代の那覇の舞台では舞台正面に向かって左の柱（シテ柱）に演題の板を掛ける仕来りだったが、これも王府の舞台以来で、多良間の舞台（幅4・7米×6・3米）で演題の札を掲げるのも、この流れにそっているものである。

コスチュームや採り物にも近世の王府芸能の面影が見える。例えば、若衆踊りの半向頭巾は、多良間のコウダテに当たり、彩り豊かな三輪の造花を頭上に差す。これは「金花花簪」といって、金色の牡丹の造花で、やはり頭上に差した。現在では金花（チンバナ）といい、前から後ろに差すし、しかも牡丹ではない。その他演技や衣裳、舞台などなど思いつくことは多々あるが、紙幅が尽きたので筆を置くことにする。